

古代四国の屋根瓦 ～国分寺創建前後の地域間関係～

7世紀後半から8世紀にかけて、多くの地方豪族が寺院を建立しました。これに伴って、寺院建築に必要な屋根瓦の生産が盛んになります。今回の講座では、四国で出土した瓦の文様や製作技法を手がかりにして、国分寺創建期である8世紀中頃を中心とした時期の地域間関係を読み解きます。

はじめに

地方においては、おおむね7世紀後半に寺院造営が始まり、8世紀にかけて数多くの寺院が造営された。寺院造営主体である在地豪族は、寺院建築に必要な技術を先進地域から導入し、寺院造営に対応した。屋根瓦の生産技術も、このとき地方へ導入された技術のひとつである。8世紀中頃には、国分寺建立の詔を受けて官営寺院である国分寺が各国に建立されるが、その際にも7世紀後半以降に在地で培われてきた造瓦技術が、国分寺造営に伴う大量の瓦の受容を賄う基盤となった。

先行研究において、おもに7世紀第4四半期～8世紀初頭における四国地域間の瓦の同範関係、同文関係が指摘されている。一方で、国分寺創建期にあたる8世紀中葉～後半にかけての四国地域の国を超えた交流については、検討されていなかった。そこで今回の講座では、瓦の文様や製作技法を手掛かりにして、四国地域における当該時期の地域間関係を明らかにしたい。

1 国分寺創建以前の在地寺院の造営

国分寺創建期の造瓦体制について検討する前に、その前段階である7世紀中葉～8世紀前半における在地寺院の造営の様相を概観しておきたい(図1)。

(1) 寺院造営の推移

寺院跡から出土した瓦の年代から推定すると、四国地域における寺院造営は7世紀中葉を上限とする時期に開始する。現段階では、^{なるでら}軽寺式軒丸瓦が出土する伊予国^{ほうあんじ}法安寺跡が最初期に建立された寺院と推定され、それから少し遅れて7世紀後半、特に第4四半期には、讃岐・阿波・土佐においても寺院造営が開始する。その後、8世紀中前半まで修繕も含めた在地寺院の造営は続くが、その間に新規寺院造営が集中する時期や寺院の分布といった様相は国ごとに違いがみられる。讃岐においては、7世紀第4四半期を中心に、各郡で同時多発的に寺院造営が進められ、いずれの郡にも2～3の寺院が建立されているのに対して、阿波においては7世紀末～8世紀初めに麻植郡・名方郡、土佐においては7世紀第4四半期～8世紀初めに長岡郡・^{あき}安芸郡・^{あがわ}吾川郡、伊予においては7世紀第4四半期に^{おち}越智郡・^{くめ}久米郡・温泉郡で集中的に寺院造営が進んでいる。

また、瓦の系譜を見てみると、讃岐は寺院数の豊富さと対応するように瓦当文様の型式も多様で、山田寺式・川原寺式・法隆寺式・藤原宮式といった7世紀後半における一般的な瓦当文様はもちろんのこと、さまざまな朝鮮系瓦が存在する。これとは対照的に、伊予においては8世紀前半までの瓦当文様のバリエーションは比較的少なく、法隆寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせが広く展開しており、他の三国では出土している藤原宮式瓦も伊予においては確認されていない。

(2) 同範・同文瓦の分布(図2)

先行研究において、以下の寺院において同範・同文瓦が出土していることが明らかにされている(高松市歴史資料館編1997・松田2004・徳島県立博物館編2015・清野ほか2019など)。このような同範・同文瓦が分布する背景としては、寺院造営主体である豪族間のつながりを想定することが一般的である。

- 讃岐弘安寺－極楽寺－阿波郡里廃寺
- 讃岐白鳥廃寺－阿波河辺寺跡
- 讃岐善通寺跡(開法寺跡)－土佐秦泉寺廃寺
- 阿波立善寺跡－土佐秦泉寺廃寺
- 讃岐弘安寺跡－伊予真導廃寺跡

2 国分寺創建をめぐる諸問題

次に、国分寺創建期の実態について論じた先行研究を確認しておきたい。

(1) 国分寺造営における在地豪族層の関与

官営寺院として造営された国分寺だが、その創建にあたっては、在地豪族層の関与があったことが指摘されている。

741年(天平13)、聖武天皇は鎮護国家を目的として、国分寺の建立を命じる(国分寺建立の詔)。また、全国の国分寺の総本山として、都に東大寺・法華寺の建設を進めた。744年(天平16)には、諸国の正税(正倉に保管されている官稲。国衙の財源)から四万束を割いて国分寺料稲として、毎年その出挙(貧民救済、勸農を目的とした利息付き種籾貸付制度。奈良時代以降は強制的に貸し付けたので、一種の雑税になった)の利息を造営料に当てるように命じた。しかし、国分寺造営の進捗状況ははかばかしいものではなかった。そこで、747年(天平19)には国衙主導と正税による国営方式を改め、郡司層による私財の寄進や労働力の提供を求め、その見返りとして郡司職を永久保障する政策をとった。あわせて寺域や造営状況の実態調査を行い、3年以内に伽藍を完成するよう厳しく督促した。さらに、756(天平勝宝8)年には、丈六仏の造像と伽藍の完成を翌年の聖武太上天皇の一周忌に間に合わせるよう、厳

令している。このような政策の結果、766（天平神護二）年から771年（宝亀2）の文献には、献物叙位（国分寺や東大寺の造営にあたって造営費用として私財を提供した者に位を与える措置）の記載が集中している。

（2）国分寺造営と中央・地方

国分寺の創建瓦を見てみると、国分寺創建以前に創建された在地寺院の系譜をひく瓦を採用する国、当時の都である平城宮と同じ系統の文様の瓦を採用する国、その両者を採用する国など、さまざまである。森郁夫氏は、各地の国分寺に平城宮式軒瓦が採用されていることから、国分寺創建にあたって中央から地方への技術援助が行われたものと考えた（森1974）。これに対して山陽道・山陰道等の国分寺に採用されている平城宮式瓦の系譜を分析した梶原義実氏は、各地においてその初現は国分寺ではなく、7世紀から続く在地寺院であることが多いことを指摘した。その結果により、これら平城宮系瓦の地方移入の契機は国分寺造営ではなく、それ以前、8世紀前葉の在地寺院造営・修造にあり、国分寺造営にあたってはそれが在地内で流用されただけであると論じた（梶原2005）。

中国・四国地域の国分寺創建瓦については、亀田修一氏が、平城宮系のもの、朝鮮半島で使用されていた瓦の系譜をひくもの（朝鮮系）、おもに7世紀後半に創建された寺院において使用されていた朝鮮系、畿内系の瓦がその地域において独自に展開したものが国分寺創建時に使用されたもの（在地系）、その他系譜がはっきりしないもの（その他）に大別できるとしており、讃岐・阿波・伊予は平城宮系と在地系の瓦で構成されていることを指摘している（亀田1990）。

（3）国分寺創建期における隣国との関係（図3）

上記のような、中央政府や国内の在地寺院との関係以外に、周辺の国の造瓦組織との関係がみられる国がしばしば存在する。ここでは、四国地域と同じく南海道に属する淡路の例を確認しておこう。

菱田哲郎氏は、淡路国分寺創建瓦が、阿波国分寺の重郭文軒平瓦・重圈文軒丸瓦と忍冬唐草文軒丸瓦を組みあわせて創出されたものと考えられることから、淡路国分寺および国分尼寺瓦は阿波国分寺の系譜を引く瓦工房で生産されていた可能性を示した。そして、国分寺の造営にあたって開始する瓦生産が、同じ南海道の隣接国との関係で始まることを明示しているとし、五畿七道という行政単位の中での技術伝播及び依存関係があると指摘した（菱田2013）。

（4）小結

以上のように、国分寺創建という国家的事業に際して、各国が、在地豪族層の協力や、中央政府・隣接国からの技術援助を受けるなどして、対応していることがわかる。四国地域における実態はどのようなものだったのだろうか。国分寺創建瓦の文様系譜・技術系譜を手がかりにして、検討しよう。

3 四国地域における国分寺創建瓦の文様系譜・技術系譜

まず、四国に存在する平城宮系瓦の系譜を整理することで、国分寺創建期における中央との関係を検討する。次に、四国地域が属する律令制下の行政区画である南海道を対象に、瓦にみられる隣接国間の関係を検討する。

(1) 平城宮系瓦の系譜

四国地域の国分寺創建瓦においては、讃岐国分寺で東大寺式（平城宮 6732 型式）系統の軒平瓦・平城宮式鬼瓦、阿波国分寺で難波宮式（平城宮 6012E 型式、6525 型式）系統の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦、伊予国分寺で平城宮 6703A 型式系統の軒平瓦が採用されている。

① 讃岐（図6）

讃岐国分寺においては、東大寺式系統の軒平瓦と在地系の軒丸瓦が創建瓦として採用されている。讃岐の東大寺式系統の軒平瓦については、国分寺創建以前の在地寺院に東大寺式系統の瓦当文様がみられないことから、国分寺創建期に採用されたものと考えられる。先行研究でもすでに指摘されているように、下外区に線鋸歯文をもつなど 6732 型式とは異なる点もあり、国分寺所用瓦として範型を創出する際に文様の一部に改変を加えたものと考えられる。鬼瓦についても、平城宮IV式Bや、V式Aに類似するが、目の形状など異なる点も認められる。

次に製作技法に着目すると、軒丸瓦の製作技法として横置き型一本づくりが導入されている。この技法も、在地には見られなかったものであることから、国分寺創建期に採用された技法と考えられる。

なお、讃岐においては、白鳥廃寺跡で平城宮 6710 型式の軒平瓦が出土している。国分寺と直接的な関係をもたない平城宮系瓦が在地寺院に存在する点は注意が必要である。

② 阿波（図3）

阿波国分寺においては、難波宮系統の軒丸瓦・軒平瓦、在地系の軒丸瓦・軒平瓦の両者が採用されている。阿波の難波宮式瓦も、讃岐と同様に国分寺創建以前の在地寺院には見られないものであり、国分寺創建にあたって阿波国内に導入されたものと考えられる。讃岐においては軒平瓦のみ平城宮式系統であるのに対し、阿波においては軒丸瓦・軒平瓦がセットで導入されている。また、基本的な文様構成は平城宮 6012E・6574・6575 と共通するものの同範ではなく、やはり国分寺の瓦として新たに創出された文様である。

製作技法については、軒丸瓦は接合式で製作されているが、その際に丸瓦先端部に筋目上の加工を施していることが注目される（図8）。難波宮の重圈文軒丸瓦とも共通していることから、難波宮からの技術導入があったものと考えられる。

③ 伊予 (図4・5)

伊予国分寺では平城宮式 6703A 系統の軒平瓦、在地系の軒丸瓦、そして後述する淡路国分寺系の軒丸瓦が採用されている。6703A 型式の軒平瓦は、平城宮と同範の瓦が真導寺廃寺跡で出土している。伊予国分寺で出土しているものは、真導廃寺と比較して文様の立体感を失われていることから、伊予国においてはまず真導廃寺に 6703A 形式が導入され、その系譜をひくものが国分寺に採用されたといえよう。また、伊予国においては平城宮 6011 型式系統の軒丸瓦が来住廃寺^{きしはいじ}で出土しているが、国分寺には採用されていない。

(2) 隣接国間の関係 (図7)

次に、隣国間の関係を文様と製作技法から見てみよう。全体としてみれば、四国地域においては、淡路と紀伊・阿波でみられるような隣接国間の強い結びつきは認められない。

その中で、特殊なのが伊予国分寺である。伊予国分寺の重圏文系軒丸瓦は、瓦当中央に蓮子のような珠文、圏線の中に紡錘形の文様を配する点から、淡路国分寺・国分尼寺の重圏文系軒丸瓦の系譜をひくものと考えられ、伊予国分寺の造営における淡路国分寺造瓦組織の何らかの関与が想定される。

また、阿波国との関係が想定できる例として、真導廃寺の軒丸瓦の丸瓦先端部に筋目上加工が施されている点も注目される。先述したように、この技法は阿波国分寺の重圏文軒丸瓦に用いられている技法である。さらに、伊予と阿波の関係を補強する要素として、阿波入田瓦窯跡の複線鋸歯文縁軒平瓦の存在を挙げられる。入田瓦窯跡は、阿波国分寺に隣接する瓦窯跡である。出土瓦は、阿波国分寺と同じく名方郡に所在する石井廃寺跡に系譜を求めることができる。阿波国内の寺院跡ではこの瓦は出土していないものの、同系統の瓦が国分寺に採用されることから、国分寺瓦窯の候補となっている。この文様を石井廃寺例と比較すると、内区文様が天地逆になるという改変が加えられている。8世紀の均整唐草文軒平瓦において、内区文様が天地逆になるのは 6703A 型式のみであることから、6703A の影響を受けて創出された瓦当文様と考えられる。丸瓦先端加工の存在と併せて考えれば、入田瓦窯跡と伊予真導廃寺との関係を想定するのが自然であろう。

(3) 小結 (図7)

以上のように、讃岐・阿波においては在地の造瓦組織を基盤としつつ、そこに中央系の技術・瓦当文様を導入して国分寺が創建されたものと考えられる。いっぽう、伊予については、国分寺創建期に中央との直接的な関係は見取れず、真導廃寺跡をはじめとする在地の造瓦組織と、淡路・阿波との関係のもと瓦生産が行われたものと推定される。

また、讃岐・伊予の両国において、在地寺院にのみ採用される平城宮系瓦が存在する。中央との直接的関係のもと導入されたものなのか、いずれかの地方を經由して導入されたものなのか、といった具体

的な系譜を明らかにしなければ、これらの平城宮系瓦の存在を正確に評価することはできないが、8世紀中葉～後半にかけて国分寺を介在しない平城宮系瓦の伝播が見られることは指摘できよう。

4 四国地域の国分寺創建期における瓦生産体制

このような国ごとの生産体制の違いが生じたのはどのような事情があるのだろうか。背景のひとつとして想定されるのは、国分寺創建の前段階における造瓦体制の充実度の違いである。1章で確認したとおり、讃岐・阿波・土佐は藤原宮式瓦が出土するとともに7世紀末～8世紀前半の瓦生産が活発であるのに対して、伊予においては瓦生産の盛期はほぼ7世紀第4四半期におさまり、国分寺創建の前段階には瓦生産が低調であったものと考えられる。そのため、国分寺創建段階に、他地域からの技術援助が必要だったのではないだろうか。その際に、中央ではなく周辺国から技術援助を受けた理由については、さらなる検討が必要である。

おわりに

最後に、今回の講座で論じきれなかった課題を述べて、結びにかえたい。

① 国分寺と関連をもたない平城宮系瓦の存在をどのように評価するか

四国地域に存在する平城宮系瓦の具体的な系譜関係を明らかにしたうえで、その意味を評価する必要がある。

② 阿波国分寺と真導廃寺跡のような、国分寺と他国の在地寺院の関係をどのように評価するか

官営寺院である国分寺と、他国の、一般的には豪族の私寺とされる在地寺院との間に、瓦当文様・造瓦技術の共通性がみられる背景には、どのような事情があるのであろうか。ひとつの仮設としては、国分寺造営に協力した在地豪族が、自身がかかわりをもつ他国の在地豪族から造瓦技術等を導入した結果、他国の私寺と国分寺との間に同系統の瓦・造瓦技術が採用された可能性も想定される。

<主要参考文献・引用文献>

上原真人 1996『日本の美術 第359号 蓮華紋』至文堂。

岡本東三 2001『古代寺院の成立と展開』日本史リブレット 17、山川出版社。

岡本治代 2020『8世紀の瓦づくりⅧ—一本づくり・一枚づくりの展開2』奈良文化財研究所。

岡本治代 2023「飛鳥・奈良時代における在地寺院の造営」『季刊考古学』別冊 41、雄山閣。

梶原義実 2015「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開-6225・6663系を中心として-」『考古学研究』52-1 考古学研究会。

梶原義実 2009『国分寺の研究—考古学から見た律令期生産組織の地方的展開—』名古屋大学出版会。

神奈川県歴史博物館 2008『瓦が語る かながわの古代寺院』神奈川県歴史博物館。

- 亀田修一 1990「瓦から見た国分寺の造営—中国・4国地域—」『考古学ジャーナル』318。
- 国分寺町教育委員会編 1996『特別史跡讃岐国分寺跡 保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会。
- 潮見 浩 1988『図解技術の考古学（改定版）』有斐閣。
- 清野孝之・藤川智之・松林玲美・岡本治代 2019「藤原宮式軒瓦からみた阿波・讃岐東部の交流の一樣相」『真朱』第12号、徳島県埋蔵文化財センター。
- 高松市歴史資料館 1997『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館。
- 徳島県埋蔵文化財センター1997『立善寺跡遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター。
- 徳島県立博物館編 2017『瓦からみる古代の阿波—寺院と役所—』徳島県立博物館。
- 花谷 浩 2002「伊予から来たの？—遠隔地間同範軒瓦に関する一考察」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会・帝塚山大学
- 菱田哲郎 2013「国分寺と窯業生産」『国分寺の創建—組織・技術編—』吉川弘文館。
- 文化庁文化財部記念物課・奈良文化財研究所編 2013『発掘調査のてびき—各種遺跡調査編—』文化庁文化財部記念物課。
- 松田重治 2004「秦泉寺廃寺出土の軒瓦—様式の共有に見る同族意識」『秦泉寺廃寺(第6次調査)—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』高知市文化財報告第27集 高知市教育委員会。
- 三原町教育委員会編 1993『淡路国分寺』三原町教育委員会。
- 森 郁夫 1974「平城宮系軒瓦と国分寺造営」『古代研究』3 元興寺文化財研究所。
- 森 郁夫 1986『瓦』考古学ライブラリー43、ニューサイエンス社。
- 毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊、奈良国立文化財研究所。
- 毛利光俊彦・花谷浩 1991「考察 屋瓦」『平城宮発掘調査報告』XIII、奈良国立文化財研究所。
- 山崎信二 2011『古代造瓦史-東アジアと日本-』雄山閣。
- 渡邊 誠 2014「四国地方の重圈文—重郭文軒平瓦」『古代瓦研究VI』奈良文化財研究所